





Ⅳ 図書館からの帰り道、我慢できずに……。

静まりかえった市営図書館。

そこに一人の小柄な少女が、本に視線を落としていた。

ぺったりと床に座り、すでに二時間を超えている。

たまにページをめくったと思ったら、再び動かなくなる。

本人は気にしていないのか、ワンピースの裾からはショーツが無防備に晒されていた。

柔らかかなこっとなショーツが縦筋に食い込んでいて、少女の呼吸に合わせて、ヒクッ、ヒククンッ、ときおり痙攣していた。

この少女の名前を、白鷺（しらさぎ）いろは、という。

痩せ細った少年のような色白の身体を、純白のワンピースに包み、黒髪はおかっぱに切り揃えられている。

まだ二次性徴期を迎えていない、小さな少女だった。

いろはは、いつもこの図書館にやってきて、いつもと同じ床の片隅で本を読んでいた。

少なくとも、夏休みに入ってから毎日のように。

ちゃんと床に座ってもいい場所だし、いつも空いているから、いろはのお気に入りの場所だ。

クラスメートたちは学校で開放されているプールで楽しんでいるようだけど、いろはは身体を動かすのがあまり得意ではないし、好きではなかった。

それにこの痩せ細った身体で紺色のスクール水着を着るのは、最近になってちょっと恥ずかしいことのように思えてきたのだ。

同じクラスの女子たちは、女の子らしく成長してきているのに、いろはは少年のように痩せているし、あばらだって浮き上がってしまうほどだった。

だからいつも、夕方になるまで図書館に籠もって本を読んでいた。

「ああ、もうこんな時間になってたんだ……」

スピーカーから流れてくる蛍の光に顔を上げると、窓からさしてくる日差しは夕焼け色に染まっていた。

この図書館の閉館は、夕方の五時。

時計を見ると、もう閉館まで五分を切っていた。

「大変。また司書の人に怒られちゃう」

この前は閉館時間に気づかずに、そのまま読書をしたことがあって、そのときは『早く帰りなさいね』と、怒られてしまったことがあった。

司書さんにして見れば、軽い一言だったのだろうけど、子供の……そして先生にさえも怒られたことがないいろはにとってはちょっと怖い出来事となっている。

「早く帰らないと、怖い魔女さんがきちゃうもんね……」

いろははお尻を叩いて立ちあがると、小さく背伸びをする。背骨がポキッと鳴って、心地いい疲労感が込み上げてきた。そのとき――、

(あれ、ちょっとだけおしっこしたい、かも?)

ほんの少しだけ、お腹に違和感を覚える。

ずっとおトイレにも立たずに読書していたのだから、きっと膀胱にはたくさん溜まっていることだろう。

(だけど、まずは本を返さないと)

そう思って、書架の奥のほう……、普段はあまり人が入らない場所へと踏み込んでいく。

このへんの本棚には、あまり読まれない海外文学の名作が、人知れずに背表紙を並べて眠っている。

いろはは、この落ち着いた雰囲気、なぜか好きだった。

言葉には言い表せないけど……。

もしかしたら、もっと大人になったら、言葉にできるのかも知れないけど。

「えーっと、確かこの本があった場所は……、あそこ、だよね」

いろはでは背の届かない場所に、一箇所だけ背表紙が抜けているところがある。

だけどいろはの背丈では、背伸びしても届きそうになかった。

取るときは、いつもハシゴを使っているのだけど、今日は運が悪いことに誰かがハシゴを使ってしまったらしい。

「これじゃ、届かないよ……っ」

なんとか背伸びをして本を入れようとしていると、

「いろはちゃん、その本は……？」

「ひっ」

背後から呼びかけられた女性の声に、いろははビクリとしてしまう。

この声は聞き間違いようがない。

この前いろはのことを叱った（と、いろはは思っている）、司書のお姉さんだ。

歳は……よく分からないけど、お母さんよりは若いと思う。

いろはは、このお姉さんが苦手だった。

だけど、いろはがそんなことを考えているとも知らずに、お姉さんは言うのだった。

「あらあら、また難しい本を読んでいるのね。いろはちゃんは、海外の作家さんが好きなの？」

「は、はい……」

「そう。それじゃあ、今度お勧めな本を用意しておいてあげる。この本は……私が戻しておくから、いろはちゃんは早く帰るのよ」

「は、はい……！」

司書に本を預けると、いろはは脱兎のごとく図書館から脱出するのだった。

☆

思わずお姉さん司書から逃げ出してきたいろはは、図書館の外にまでダッシュしてくると、ふう、と大きく一つ息をついて立ち止まった。

息を整えながらも、夕日に染まった図書館を振り返る。

「意外と、司書さん、悪い人じゃないかも……？」

今度、オススメの本を教えてくれるっていったし。
てっきり、魔女みたいに怖い人なのかと思っていた。
明日は、ちょっとだけお話ししてみてもいいかもしれない……。
それにお礼も言いたい。
高いところにある本を戻しておいてくれたっていう。……びっくりして逃げ出してきてしまったけど。

「明日は、ドキドキしないように話せたらいいな……」

いろはは呟くと、夕日に染まった家路をとてとてと歩き出す。

「帰ったら、お米研いで、お風呂洗っておかないと……」

両親は共働きなので、いろははこの年でできることをなるべく自分でやるようにしていた。

それは少年のように痩せ細った身体をごまかすための、少しでも背伸びをしたいという思いからなのかも知れない。

だけどそれはいろはにも分からないことだった。

(早く、大人になりたいなぁ……)

いろはは、いつもそんなことを考えている。

そのためには、たくさん本を読んで、いっぱい勉強して……。

この夏休みには、できることは沢山あるはずだ。

……とりあえずは、今夜は夏休みの宿題を片付けておかないと。

「……あ、あれ……？」

ふといろはが違和感に気がついたのは、帰路を歩いているときだった。

なんか、急におしっこがしたくなってきてしまったのだ。

そういえば図書館を出る前におしっこをしたかったような気がする。

読書しているときは気にならないものだけど、意識すると尿意は急に強くなってくる。

(どうしよう……。図書館に戻っておトイレ貸してもらったほうがいいかも……?)

思うけど、だけど閉館した図書館に戻っておトイレを貸してもらうのは気まずいし、それになんだかととても恥ずかしいことのように思える。

ここは、ちょっとだけ我慢して、家に帰ったほうがいいだろう。

(家まで我慢、できるよね……。大丈夫、大丈夫……!)

自分に言い聞かせるように、何度も心の中で呟く。

家までは、歩いて十分くらいかかる。

だからちょっとくらいの尿意なら我慢できるはず……。いろはは、いろははそう考えたのだ。

「もう子供じゃないんだから、おしっこくらい我慢しないとっ」

呟くと、家路を急ぐ。

……。けど。

その考えは、ちょっとだけ甘かったようだ。

「あっ、あうう……。やっぱりちょっとピンチかも……。っ」

意識したら急にこみ上げてくるのが尿意である。

振り返ってみれば、今日はお昼におトイレに行ってからと言うものの、ずっと図書館で置物のように読書に耽っていた。

エアコンが効いた図書室だから、あまり汗をかかないし、それだけ飲んだお水が膀胱に溜まっている。

「やだ……。おなか、こんなにパンパンになってるなんて……。ううっ、ちょっと、も、漏れそう……。っ」

シンプルな純白のワンピースの上からお腹を押さえてみると、お腹は水風船のようにパンパンに膨らんでいた。

まさか、こんなに溜まっていたなんて……。

いろは自身も驚くほどに、おしっこは溜まっていたようだ。

「ううっ、おトイレ……。家まで我慢、我慢……。んんっ」

ジョボッ！

顔をしかめながら歩いていると、ついにおまたから小水が漏れ出してきた。

ちょっとだけチビッた……。にしては、ちょっと量が多いみたいだ。

クロッチの裏側に、生暖かい感触が染みこんでいく。

「あぁ、ううっ。おしっこ、ちょっと、も、漏れて……。ううっ！もう、子供じゃないのにい……。っ」

ちょっとした敗北感。

だけど少しだけ尿意を解放してしまったおかげだろうか？

お腹が、ほんの少しだけ楽になったような気がする。

だけど油断することはできない。

こうしている瞬間にも、いろはの小さな膀胱には、おしっこが濾過されて溜まっているのだ。

「早く帰らなくと……。ううっ、お腹、苦しいけど……。あともうちょっとだけ我慢すれば……。っ」

あと五分くらい歩けば、家に着く。

それがいろはの心の支えになっていた。

だけどお腹を気にしながらの歩みは、牛歩のように遅くなっている……。っ。

「ううっ、またお腹、苦しくなってきたら……。あ、だ、だめ……。おまたがキュンキュンして……。っ」

ジョボボ……。っ。

どんなにおまたに力を入れても、ショーツの中が生暖かくなっていく。

「だ、だめっ。勝手に漏れて、こないでえ……。っ」

チョロロ……。っ。

そんないろはの願いも虚しく、クロッチの裏側は生暖かくなっていった。

女の子の尿道は、太くて短い。

だからおしっこを我慢することができない身体になっているのだ。

無理に我慢しようとするれば、おまたがキュンキュンと痙攣して、

尿意に意識が真っ白になってきてしまう。

「ああっ、う、うそ……っ。いやぁ……っ」

ジョボ、ジョボボ……。

何度もおちびりを重ねながらも歩いていると……、

そのときは、ついに訪れてしまった。

太股を、イタズラっぽく撫で回される感触。

それは少女の恥ずかしい染みを隠すためのクロッチが、力尽きたなによりもの瞬間だった。

「あっ、あふう。こ、こんなところでおもらしするなんて、イヤだ、よお……っ。もう、大人なんだから、子供じゃないんだから……おもらしなんて……っ」

太股を撫で回される感触に、意識が真っ白になる。

けどどこでおまたの力を抜くわけにはいかなかった。

けど、おまたの力だけでは、もうおしっこを我慢することもできない。

そんないろはが選んだ、最後の手段。

それは。

「ああっ、だ、だめえ……！」

ギュッ。

いろはは、自らの股間を両手で押さえると、おしっこの漏洩を防ぐ。

前抑え――。

それは少女として、あまりにも恥ずかしく屈辱的なポーズだった。

おまたの力だけでは我慢できなくなった女の子は、こうして両手で尿道を押さえつけて我慢するしかないのだ。

「あ、ああぁ……。やだ……。スカートの上にまで、滲み出して、うう……。！」

じわり、

指先に感じる、生暖かい感触。

それはショーツに染みこんだおしっこが、前抑えされることによってスカートに滲み出してきた感触だった。

折悪しく、今日は洗いざらした白のワンピースを着ている。

いろはのスカートの股間の部分には、恥ずかしいレモン色の染みができているに違いなかった。

……。怖くて前抑えを離すことができないから、確認しようもないことだけだ。

「……。やだ、おしっこ臭い……」

それでもなんとか片手を離して匂いを嗅いでみると、やはりだった。

いろはの指先からは、ツーンとしたアンモニア臭が漂ってきている。

その匂いに絶望感がこみ上げてきて、尿意は更に強くなる。

じゅもも……。じゅわわ……。

前抑えしているというのに、少しずつおしっこが漏れ出してきてしまう。

「ダメ……っ。まだ、ダメなんだから……っ。早くお家に帰らないと……。こんな恥ずかしいところ、誰かに見られたら、恥ずかしすぎるんだから……っ」

人気がないのが、せめてもの救いだろうか？

だけど、こうなってしまうと決壊するのは時間の問題だった。

「早く、お家のおトイレで……。おっおっおしっこお……」

尿意を我慢しすぎて、意識が真っ白になっている。

いろはは両手でおまたを前抑えして、ゆっくりと歩を重ねていくことになった。

じゅもも……じゅももも……。

「まだ、出ないでえ……っ。ううっ、おまた、おしっこ我慢しすぎて、痛い、よおお……っ。は、早くおしっこ……したい……うう」

いろははギュッと前押さえするあまり、自分でも気がついていなかった。

小さな身体を、『く』の字にかがめようとしていることを。

小さなお尻を、はしたなくつきだしてしまっていることを。

いろはは尿意を我慢するあまり、気づく余裕さえも無かった。

「もうちょっと、もうちょっと……その角を曲がれば、もうお家なんだから……。あともうちょっとの我慢、なんだから……」

ここまで読んでくれてありがとうございました。
体験版はここまでです！

他の大決壊シリーズも配信中です！

